

「中国語部屋論」 Chinese room argument

「概念論」 Conceptualism

「選言主義」 Disjunctivism

「感覚与件」 Sense-data

「準実在論」 Quasi-realism

1、リストされた語についての事典との対応状況

英語圏の哲学界で新語急増現象が発生していることには、私は好感をもっていない。哲学に新しい領域から新しい概念が導入されて新語急増となったのではなくて、他人の哲学に対して自己流を誇示するために新語が作られているように思われるからだ。哲学の共食い現象の結果であるように思われる。

こうした状況に対しては概観、展望をまず明らかにして、研究対象の取捨選択ができる条件を作らなくてはならない。私が、選んだのは、哲学の辞書（事典・辞典）から新語を拾い出して翻訳するという作戦である。

前回、リストに挙げた項目で、まだ翻訳していない項目について、手元の辞書の掲載状況を調べると次のようになっている。

A=Audi(ed.)The Cambridge Dictionary of Philosophy(1999)

B=Blackburn: Oxford Dictionary of Philosophy(2016)ブラックバーン三版

L=Lacy:A Dictionary of Philosophy(Routledge 1996)レイサー三版

P=Psillos: Philosophy of Science A-Z(2007)プシロス科学哲学小事典

W=The Blackwell Dictionary of Western Philosophy, (2004)

Actualism (A, B, L, W) , Agglomeration (B, W) , Analysis(paradox of) (L) , brain in a vat (A, B, W) , Chinese room argument (A, B, L, W) , Combinatorialism (A, L) , conceptualism (A, B, W) , Darwin machine (B) deflation theory of truth (A, B, W) , Dialetheism (L) , disnotation theory of truth (B) , Doxastic (A, B, L, W) , Egocentric predicament (A, B, L, W) , Frege argument (B, L) , Generality constraint (B, L) , Innate (A, B, L, W) , Internalism and externalism (A, L, W) , Intrinsic and extrinsic (A, B, L, W) , Language of thought (A, B, L, W) , Mach's Principle (A, B, L) , Mereology (A, B, L, W) , Methodological solipsism(A, B, L, W) , Paraconsistency (A, B, L) , Perdurantism (A, B, L) , Process philosophy (A, B, L, W) , Psycholinguistics (A, L, W) , Psychosemantics (A, B, L) , Ramsey sentence (A, B, L, P, W) , Superassertible (B, L) , Supervaluation (A, B, L) , Synechism (A, B, L) , Tacit and implicit knowledge (B, L, W) , Thick and thin concepts (B, L, W) , Tracking (A, L)

今回の連載では、同一の項目について異なった事典から引用して比較する。これらの項目の中には、内容的には日本でよく知られているが、辞書の項目にはなっていないものがある。「水槽の中の脳」(brain in a vat) とか「中国語部屋論」(Chinese room argument) とかである。

2、中国語部屋論の時代的推移

最近ではAI論のハシリとして「中国語部屋論」(Chinese room argument) が再び注目されている。この議論の出典はジョン・サール「心・脳・科学」(土屋俊訳、岩波書店)の二章である。

「あなたが部屋の中に閉じ込められているとします。その部屋の中には中国語の記号が入ったバスケットがいくつかあります。ここであなたは、(私と同様に)中国語をひとつも理解することができないとしてみましょう。ところがその部屋には、その中国語の記号を操作するための規則を英語で記した本があなたのために用意されていたことにします。その規則には、中国語の記号の操作がまったく形式的に定めてあります。つまり、中国語の記号の意味論ではなく、統語論に基づいて操作が定めてあります。たとえば、その規則は、=番のバスケットからよるよるした記号を取り出し、二番のバスケットから取ったものによるよるした記号のとなりに置け」というようなことを述べています。さてここで、それまでの記号とは異なる中国語の記号が部屋の中に送り込まれてきて、しかもあなたには中国語の記号を送り返す別の規則が与えられたと想定しましょう。そしてさらに、部屋の中に送り込まれてきた記号は部屋の外の人によってあなたが知らないうちに「質問」と呼ばれており、また、あなたが部屋から送り出す記号は「質問に対する解答」と呼ばれていると想定してみましょう。さらにまた、プログラムのプログラミングが卓越し、また、あなたの記号操作の能力も卓越しているので、すぐにあなたが送り出す解答が中国語を母語とする人の解答と区別できなくなったと想定します。そこであなたは、部屋の中に閉じ込められ、送り込まれてくる中国語の記号に反応してまた別の中国語の記号をあちらこちらへと動かしたり送り出しているというわけです。さて、今私が描写したような状況に基づくならば、あなたは、中国語の形式的な記号を操作することのみによって中国語をいささかでも学んだとはいえません。」(同 34 頁)

サール(John Searle 1932-)は、外見からして言葉を完全に操っているが、全く理解していない場合がありうるという想定を語っている。コンピュータが言語を使ったとしても、理解したとは言えないという帰結が引き出される。この帰結に間違いはないだろう。サール自身が、この想定を「意味論 semantics の欠如、統語論 syntax のみ」と表現している。「統語論だけでは言葉を理解できない」というのはあたり前である。すると問題は、「統語論 syntax のみでも、行為の外見だけは正しく言葉が理解できたかのようにふるまうことができる」という可能性が示されなければならないが、その証明にサールが成功しているわけではない。

最近の AI 論の文脈では、よくできたコンピュータは人間の心と同じだという「強い AI」論を論駁するために「中国語の部屋」論法が使われたのだが、強いか弱いかは問題にならないという議論が多い。コンピュータは人間の心と同じになれない、一定の条件下で近似的に人間の心と同じ課題を果たすことができるという「弱い AI」論が正しいが、その「弱い AI」でも碁の名人を負かすことができる。

「コンピュータは心を持つか、自由意思を持つか」を議論することについて、松尾豊は「こうした議論は楽しいものではあるが、人工知能全体を概観するときには、あまり多く語る必要はないと思う。私の考えでは、特徴量を生成していく段階で思考する必要があり、その中で自分自身の状態を再帰的に認識すること、つまり自分が考えているということを自分でわかっているという「入れ子構造」が無限に続くこと、その際、それを「意識」と呼んでもいいような伏態が出現するのではないかと思う。」（「人工知能は人間を超えるか」角川、2015年 56 頁）と述べている。

日本の事典では、岩波書店「哲学・思想事典」が、「サール」の項（土屋俊）と「チューリング・テスト」の項（信原幸弘）、土屋俊他編「AI 事典」（共立出版、柴田正良）が「中国語の部屋」を紹介している。

Chinese room argument : Blackburn: Oxford Dictionary of Philosophy (2016) ブラックバーン三版の後半部分

「The thought experiment has been heavily criticized, この思考実験は厳しく批判されてきた。 most forcibly on the grounds that it is the overall system (not just I myself, in the middle, shifting paper) that is appropriately compared to a programmed computer, もっとも強烈な批判は、プログラムされたコンピュータと比較してよいのは、汎用的なシステムであって、たとえば中ぐらいの、変換する文書のなかにおかれた私自身などではない。 but also on the grounds また次のような理由からも批判された。 that the strong AI research program is entitled to develop ways of bringing symbols into further interaction both with the environment, and with behaviour of the machine, 「強い AI」の研究プログラムは、当然、記号を環境と k 機械の動作とのより広い相互作用へともたらすような開発を含んでいるという理由である。 and that these together generate a better model of the cognitive subject. こういう相互作用が一緒になって、認知する主体のもっと優れたモデルを生み出すはずだというのである。」

サールの再反論に言及しているのは、Audi(ed.)The Cambridge Dictionary of Philosophy(1999)である。その Searle の項目に次のような記述がある。

「The Rediscovery of the Mind (1992) continues the attack on the thesis that the brain is a digital computer, and develops a non-reductive “biological naturalism” on which intentionality, like the liquidity of water, is a high-level feature,

which is caused by and realized in the brain. 「心の再発見」(1992)は、「脳はデジタル・コンピュータである」というテーゼに対する攻撃を継続している。そして非還元的「生物学的自然主義」を展開している。それによると志向性は、水の流動性と同様に、脳によって引き起こされ、脳の中で実現される高次の局面である。」

これは単純化すると「脳はやわらかいタンパク質だから、半導体でできたコンピュータには還元できない」という議論である。「情報と媒体とは有縁ではない」というのが、普通の場合である。紙に書いても、石に書いても、文字の内容に変わりはない。蜜蝋と文字の関係と同じである。サールの主張した、「非還元的生物学的自然主義」は、媒体の違いがあるから、脳はコンピュータに還元できないという有縁性の主張を含んでいる。この点は注意を要する。

「中国語部屋論」のまとめ:この論点が生された当時は「ヒトの脳はAIに置き換え可能か」という問いの答えとして「置き換え不可能論」の論点として提示された。現代では、置き換え不可能であっても、能力的に「AIがヒトの脳を超えることが可能」という事態に直面している。

3、概念論と選言主義

conceptualism (概念論) は、中世末期の普遍論争に登場する唯名論 (nominalism) の反対の立場として説明されることが多い。Audi(ed.)The Cambridge Dictionary of Philosophy(1999)の説明はユニークで現代的な概念として説明している。

「概念論 (conceptualism) Audi(ed.)The Cambridge Dictionary of Philosophy(1999)

「conceptualism, the view that there are no universals and that the supposed classificatory function of universals is actually served by particular concepts in the mind. 概念主義、概念論: 普遍は実在しない、普遍の分類機能とされているものは実際には心の中の特定の概念が働いているのだという見方。

A universal is a property that can be instantiated by more than one individual thing (or particular) at the same time; 普遍とは、同時に一つ以上の個体 (もしくは特殊) によって例示されるような特質である。e. g., the shape of this page, if identical with the shape of the next page, will be one property instantiated by two distinct individual things at the same time. たとえば、このページは、もしも次のページと同じ形であるならば、同時に二つの異なる事物によって例示される一つの特質であろう。If viewed as located where the pages are, then it would be immanent. ページの存在する場所が特定されていると見られるならば、それは内在的であろう。If viewed as not having spatiotemporal location itself, もしも時空間的な特定そのものはないと見られるならば、but only bearing a connection, ただ [時空間的な] 結合を保持しているとだけ見られるならば usually called instantiation or exemplification, 通常は事例とか例示

とか言われる。 to things that have such location, そのような場所の特定を含むものについても。 then the shape of this page would be transcendent and presumably would exist even if exemplified by nothing, as Plato seems to have held. というのは、ページの形は超越的であろうから。何ものによっても事例化されなくても実存するとみなされるからである。プラトンは、そう思っていたと思われる。The conceptualist rejects both views by holding that universals are merely concepts. 概念論者は、普遍はたんに概念に過ぎないと信じてどちらの見方も拒否する。Most generally, a concept may be understood as a principle of classification, something that can guide us in determining whether an entity belongs in a given class or does not. もっとも一般的には、概念は分類の原理であると理解される。ある実在が、特定の集合に属するか否かを決定するさいに我々を導く原理である。Of course, properties understood as universals satisfy, trivially, this definition and thus may be called concepts, as indeed they were by Frege. もちろん、特性は、普遍的なものが通常この定義を充足するものとして理解されている。それゆえ概念と呼ばれる。フレーゲでは実際そうになっている。But the conceptualistic substantive views of concepts are that concepts are (1) mental representations, often called ideas, serving their classificatory function presumably by resembling the entities to be classified; しかし、概念の概念実体観は、(1) 概念は、しばしばイデアと呼ばれる心的な表象である。分類される実在の類似にしたがって分類の機能を果たす。

or (2) brain states that serve the same function but presumably not by resemblance; 同一の機能を果たすが、おそらく類似によるのではないような脳の状態。

or (3) general words (adjectives, common nouns, verbs) or uses of such words, an entity's belonging to a certain class being determined by the applicability to the entity of the appropriate word; 一般的な単語 (形容詞、普通名詞、動詞)、もしくはそのような単語の使用、実体の、適切な単語のその実体への適用可能性によって決定される特定のクラスへの帰属。

or (4) abilities to classify correctly, whether or not with the aid of an item belonging under (1), (2), or (3). (1) (2) (3) へ帰属する項目の助けによるのではないような、適切に分類する能力。

The traditional conceptualist holds (1). 伝統的な概念論者は、(1) を支持する。

Defenders of (3) would be more properly called nominalists. (3) を弁護する人は、唯名論者と呼ばれるのが適切であろう。

In whichever way concepts are understood, 概念がどの枠で理解されるにせよ and regardless of whether conceptualism is true, 概念論の真偽にかかわらず、 they are obviously essential to our understanding それらが我々の理解に不可欠であることは明白である。

and knowledge of anything, even at the most basic level of cognition, namely, recognition. 何らかの知は、認知のもっとも基礎的な水準の場合でも、再認知である。The classic work on the topic is *Thinking and Experience* (1954) by H. H. Price, who held (4). この問題の古典的な仕事は *Thinking and Experience* (1954) by H. H. Price であるが、彼は (4) の支持者である。」 (Panayot Butchvarov)

私はこの項目は出来が悪いと思う。「概念は、分類の手段である」という命題を中心に説明をつけているが、俗流の心理主義の域をでない。フレーゲに言及しているが、不十分である。

通称「マクミラン哲学百科事典2版」(D. M. Borchert (ed.) *Encyclopedia of Philosophy*, Gale 2006) 7巻に「知覚、現代理論」(perception, contemporary views) という大項目があり、そのなかに「概念主義」(conceptualism) 「選言主義」(disjunctivism) が登場する。

「概念主義」(conceptualism) : 「マクミラン哲学百科事典2版」(D. M. Borchert (ed.) *Encyclopedia of Philosophy*, Gale 2006) 7巻

「Some philosophers of perception have propounded Conceptualism, the view that every sensory element of perception involves an exercise of concepts by the perceiver. 知覚の哲学者には、厳格に提示された概念主義を奉ずる人々がいる。知覚のあらゆる感覚的な要素には知覚者による概念の実行が含まれるという見方である。Conceptualism is often held on the ground that the only way that a state can serve as a reason for belief is if the state is conceptual through and through. 概念主義が支持される理由は、しばしばつぎの理由による。もしもある状態が徹底的に概念的であるならば、ある状態が信念を支える理由として役立つ唯一の道であるという理由である。Conceptualism is defended in this way by, 概念主義はこうして Bill Brewer (1999) と John McDowell (1994) によって擁護されている。although both argue for the position in the context of defending Disjunctivism (a view explained below) rather than Intentionalism. 志向主義というよりは、選言主義を支持するという文脈でこの立場を擁護している。」

ここにははっきりと現代的な意味での「概念主義」が登場している。その説明として使われているのが「選言主義」である。しかし、この言葉が使われ続けているかどうかは、疑問である。

Disjunctivism 選言主義 : 「マクミラン哲学百科事典2版」(D. M. Borchert (ed.) *Encyclopedia of Philosophy*, Gale 2006) 7巻

「In recent years there has been a resurgence of attempts to defend Naive Realism

by giving what is called a disjunctive account of experiences. ここ近年、経験の選言的な評価と呼ばれるものを示すことによって素朴实在論を擁護する企ての復活が行われている。

Disjunctivists challenge the claim that for any veridical perceptual state of a subject (seeing a ripe tomato, for example), an event of the very same kind, individuated by its phenomenal character, could occur in a misperception. 選言主義者は次のような主張に挑戦している。主観のありのままの知覚状態にとって、(たとえば熟れたトマトを見る)まさに同じ種類の出来事が、その現象的特徴を伴いつつ、知覚の誤りの場合にも起こりうるという主張である。

As stated earlierすでに述べたように, one can describe the state of seeing the tomato トマトを見るという状態を、あたかも as one in which "it appears to you as if there is something red and round before you," ひとがそこで「それは貴方にまるで赤くて丸いものが目の前にあるかのように現象する」というのと同じ見る状態で記述することができる。

and this state can occur either in veridical perception, illusion, or hallucination. この状態は現実の知覚のとき、幻想・幻覚のときにも起こる。

According to Disjunctivists, the state that we describe in this way is not a unified kind. 選言主義者によれば、われわれがこうして記述している状態は統合された種類のものではない。The most that can be said about it is that this it is これについて語りうる最大のことは、次のどちらかであるということである。either (1) a state in which you are veridically perceiving a red and round tomato (in which case you are directly aware of the tomato and its properties)赤くて丸いトマトを実際に見ている状態(トマトとその特徴を直接に気づいている状態) or (2) a state in which you are having a hallucination or an illusion that is indistinguishable from a veridical perception as of a tomato. さもなければ、トマトの現実の知覚から区別することができないような幻覚・幻像をもつ場合である。」(2005 Michael Pace)

概念論、概念主義のまとめ。山内志朗「普遍論争」(平凡社ライブラリー)が示すように中世末期の「普遍論争」が歴史的に忠実に紹介されてきたものかどうかには疑問がある。現代的な意味での「概念論=概念主義」とは、「知覚には概念が内在する」という観点である。別の言い方をすると感覚が、概念、悟性、知性から独立に外部世界の情報源となることはない。初期の分析哲学では、感覚与件説 Sense-data theory が前提となっていたが、その前提が崩壊した。

4、感覚与件説

Sense-data (ブラックバーン三版)

「Literally, that which is given by the senses. 言葉通りには、感覚によって与えられるものという意味である。But in response to the question of what exactly is so given, sense data theories posit private showings in the consciousness of the subject. 何が正確には与えられているのかという問いに答える場合には、感覚与件理論は、主体の意識における私的な鑑賞を持つことになる。In the case of vision this would be a kind of inner picture show which itself only indirectly represents aspects of the external world (see REPRESENTATIONALISM). 視覚の場合に、これは、外部世界の様相をただ間接的に再現するだけの一種の心内絵画となるだろう。The view has been widely rejected as implying that we really only see extremely thin coloured pictures interposed between our mind's eye and reality. この見方は、われわれが、心と実在の間に挿入された、極端に薄く色づけられた絵を実際に見ているに過ぎないという含意をもつものとして拒否されるようになって来ている。Modern approaches to *perception tend to reject any conception of the eye as a camera or lens, 知覚の現代的な研究は、目をカメラとレンズとみなすようなあらゆる概念を拒否する傾向にある。simply responsible for producing private images, [カメラ・レンズ的な目は] 私的なイメージを作り出すことにだけの作用をするとみなされている。and stress the active life of the subject in the world as the determinant of experience [知覚の現代的な研究は、] 経験の決定要因として世界における主体の能動的な生活を強調する。(for an early version of this approach, see CONDILLAC). このアプローチの初期のかたちはコンディアックを参照。」

この項目の最後につけられた「コンディアックを参照」という言葉に私は不賛成である。彼の「感覚論」(1754年)には無理な思考実験が多くて、その論点を分析することが困難である。ブラックバーンは、自分の「準実在論」に合わせて「感覚与件」を解釈している。ブラックバーン三版にも「準実在論」という項目はあるのだが、ここではあえてプシロス科学哲学小事典から引用する。

「準実在論」Quasi-realism (プシロス科学哲学小事典)

「Version of realism (or anti-realism) developed by the British philosopher Simon Blackburn (born 1944). 実在論 (もしくは反実在論) の一種で、英国の哲学者ブラックバーンによって開発されたもの。The main thought is that quasi-realists can 'earn the right' to talk about the truth-or-falsity of theories, 主たる思想は、準実在論者は理論の真偽について語る権利を得ることができるという点である。without the concomitant commitments to a realist (mind independent) ontology: 実在論的 (心から独立した) 存在論に共犯者的に加担することなくである。the posited entities inhabit a 'projected' world. 定立された実体は投企された世界に内在する。Further reading:

Blackburn (1993)』

それではプシロスが感覚与件をどのように記述しているか。

感覚与件 sense-data (プシロス科学哲学小事典)

Sense data: The content of experience: What a subject senses. 経験の内容、ある主体の感じているもの。

They have been posited to account, among other things, for the phenomenological (or qualitative) similarity between veridical and hallucinatory experiences. 実際的な経験と幻覚的な経験との現象学的もしくは質的類似性のゆえに、事物のなかで、所在を確認されるべく定立されている。

A sense datum is supposed to be the common factor between them. 感覚与件は、実際的な経験と幻覚的な経験との共通の因子だとみなされる。

(As, for instance, when I see a green leaf and when am hallucinating a green leaf—the green-like image that is common to both experience is a sense datum. たとえば私が緑の葉を見るとき、そして私が緑の葉を幻覚するとき、これに似た緑は両方の経験に共通である。これが感覚与件である。)

Accordingly, sense data are supposed to be mental items, 当然、感覚与件は心的なものだとみなされる。

though some philosophers have taken them to be neutral Elements. 中立的な要素であると見なす哲学者もいるが。

For some empiricists, they constitute the incorrigible foundation of knowledge, though this view has been criticised by Sellars in his attack on the myth of the given. 経験主義者にとっては、感覚与件が知識の訂正不可能な基礎を形作る。この見方は、セラーズによって所与の神話批判で批判された。

If sense data are taken seriously, the issue crops up of how they are related, if at all, with material objects. もしも感覚与件が重要だと見なされるなら、それはいかに語られようとも、結局は物質的な対象とともに切り取りをする。

Phenomenalism is the view that material objects are constituted by actual and possible sense data. 現象主義は、物質的な対象は現実的ないし可能的な感覚与件によって構成されるという見方である。

Some versions of it claim that talk of material objects is fully translated into talk about sense data. ある種の現象主義は、物質的な対象についての語りはすべて感覚与件についての語りに翻訳されると主張している。

But this last view has been discredited, この見方は信用されていない。その理由の一つは、partly because this translation would require the truth of certain

counterfactual conditionals 翻訳にはある種の反実仮想の真実性を要求するからというのである。(e.g., if I were to look at so-and-so, I would experience such-and-such sense data 私が何かを見るなら、何らかの感覚与件を経験している), and it is hard to see what other than material objects could be the truth-makers of these conditionals. この物質的な対象のほかに何がこの反実仮想文の真理形成因子となるかは分からない。

See Empiricism; Foundationalism Further reading: Huemer (2001) 」

ここに言及されたセラーズ「所与の神話」は、浜野研三訳「経験論と心の哲学」(岩波書店2006)に採録されている。(第2回終わり)